



研究エッセイ

ESSAY

へろきこイキ 「鮮漁」図のあれこれ

田島 佳也 (神奈川大学日本常民文化研究所・教授)

1 近世経済史研究と図像資料

私の専門は近世日本経済史である。主に幕末の松前藩の生産・流通構造を松前蝦夷地に進出した商人の経営文書、いわゆる文献史料で探ってきた。松前藩は幕藩体制のなかにあつて農業生産が未展開であり、藩財政の基礎を幕末、鮭・鮭・昆布などの漁業生産とその漁獲物販売に負っていた。当然、先の課題を追究するには漁業生産のあり方や漁獲物の加工・梱包(製品化)・販売のあり方に関心を向けざるを得ず、ひたすらその実態把握に汲々としてきた。

鮭は昔、大量に漁獲されたが、今やわが国では幻の魚となって久しい。1955年ころまでは多少鮭が獲れていたらしいが、漁撈体験も実見もしたことがない。当然、漁撈の実態はおるか、漁具や漁船、加工道具、漁獲物の製品化の工程、結束や梱包、運送方法など理解できないことばかりであった。

商人の経営を分析するには文書に記された漁場への仕込み商品名や漁獲物製品を作るために使われた道具、材料名などを認識する必要がある。しかし、たとえば、帳簿には仕込み商品である「国分 個」や「実子 束」と書かれているが、商品の実態や商品の数を表す助数詞、その単位の内容が皆目解らず、難儀した。結局「国分」は煙草、「実子」は縄の商品名だった。煙草、縄まで書いてくれれば商品が判明し、その用途も把握できるのだが。もっとも、商人にとってみれば自分たちが把握できればよいことで、何も丁寧に記帳しなくてもよかったのである。江戸時代は営業税徴収などがなかったからなおさらである。

とはいっても、研究上、経営実態を知るためにはまず、以上のことを基礎作業として調べなければならない。研究当初、これらのことを知りうる手軽な商品事典があったわけではない(今もない)。それで関連文献の博捜や商品の扱い専門店、年輩に聞き取りして理解していくことになる。漁撈についても同様である。隔靴搔痒の感がいつもあるが、道具やその利用方法、手順などを漁民の方々に体験を交えた聞き取りや見聞を通じて理解・納得してい

くことになる。その際、役立ったのは昔の詞書付きの絵図や写真、百聞は一見にしかず、博物館の陳列品である。陳列品はそのものの体温を実感できるメリットがある。たとえば、縄についてみれば、材質や太さ、縫り方の違いによって用途の違いを類推でき、説明書きによってイメージも正確になる。観念の域をでないが、それは図像資料が発信する情報の強みである。私の経済史研究も図像資料と関わってきた。だが、それほど意識して来ず、研究理解の補助教材として利用してきたにすぎないと思う。

2 『蝦夷島奇観』と『蝦夷訓蒙図彙』の鮮漁図

そこでこれまでの反省に立って改めて図像資料を検討すると、いろいろなこと気づかされる。その一端を紹介したい。

掲げた絵図 はともにへろきこイキ(鮮漁)図で、は漁獲「ニシンを干すの図」、は「ニシンを陸揚げし早切にかけ乾す図」である。は寛政12年(1800)の秦 櫛磨『蝦夷島奇観』(『奇観』と略。雄峰社 1982年)所載の彩色図である。は松浦武四郎「蝦夷訓蒙図彙」巻の二(「図彙」と略)所載の白黒図(朱線の引かれているところもある)であり、は「図彙」に続く、同じく武四郎の「蝦夷山海名産図会 巻一」(「図会」と略)所載の鮮乾燥図である。「図彙」「図会」(『松浦武四郎選集二』北海道出版企画センター 1997年)は題名が異なるが、ともに武四郎が嘉永3年(1850)から稿を進め、万延元年(1860)以降に完成した作品であり、一書といえるものである。一方、佐々木利和、谷澤尚一両氏の解説・人物伝によると、秦 櫛磨とは寛政10年(1798)~12年にかけて3回蝦夷地へ渡った幕吏村上島之允のことで、『奇観』はアイヌの古態を後世に伝えていく意図から執筆されたという。

さて、掲げた図をみよう。には茅葺きの「魚坪」(なつぼ)網干場の網、乾燥台の鱈鱈などの名称が記され、漁獲鮭の加工の様子が描かれている。詞書はない。次頁に「へろき写生」図を載せ、詞書でその特徴を述べているが、漁撈の実際の説明はない。ただ、彩色図ゆえ状況



①ヘロキコイキ(鮮魚)図(秦 穂磨『蝦夷島奇観』より) ②鮮捕 ③ニシンを干すの図
④ニシンを陸揚げし早切りにかけ乾す図 (以上 秋葉 実 編『松浦武四郎選集二』より)

が写実的であるが、静態的である。対するは白黒図とはいえ、2人乗りの小船9艘に乗込んだアイヌの躍動感溢れる刺網漁撈の様子が描かれ、その特徴についての詞書がある。(14艘の刺網漁)もと同様の図であるが、早切に鮮を乾す者が異なる。

は和人の女(左向きの作業)はメノコ(右向きの作業)である。またはより鱈乾と鮮の束ね作業が早切の後ろに、また漁撈はるか後映に描かれ、和人の女がひとりもいない。しかし、構図的には基本的に同じ作業図であり、しかも特徴的なのはアイヌによる漁撈だけで、和人漁撈者はひとりもない。も、早切乾すメノコと束ねるメノコ、それにモッコを担ぐアイヌを加え描いているが、鱈乾燥作業和人(描き方はとも同じ)を軸にしたとの連動図である(3人乗り小船もあるが)、要するに、とも

の派生図・改良図にすぎない。これを確認し、再度とを比較検討すると、ともに相似構図であることがわかる。「図彙」「図会」を翻刻した秋葉実氏も、この粉本のひとつを『蝦夷島奇観』や『蝦夷生計図説』にならい執筆したもののようにと解説しているが、とを比較すれば、魚坪前の早切で働く和人女性、かがんで鮮を束ねるメノコ、乾台に鱈を並べる和人男性、2人で鮮を運搬する男性(『奇観』は和人とアイヌ、「図彙」はアイヌ同士)の構図は明らかに蝦夷地鮮場を描写した『奇観』のそれを粉本として利用したものであることが明瞭である。「図彙」「図会」も蝦夷地鮮場の描写である。武四郎が松前蝦夷地を廻浦した時代、松前地ではすでにに描かれるほどのアイヌが住んでいなかったからである。『奇観』と「図彙」の成立年代には約半世紀の開きがあるが、それにしても、弘化2年(1845)3年、嘉

永2年(1849)と蝦夷地を踏査して初航・再航・三航の蝦夷日誌をまとめ、幕府の蝦夷地直轄にあたっては安政3年(1856)以降、幕府御用雇になった武四郎が何故、『奇観』をアレンジ・利用したのであろうか。武四郎は誰よりも鮮場の実景を見知っており、絵心もある。より詳細に活写できたのではないかと不思議に思われる。「図会」ではアイヌによる鱈釣漁やイベウ(おひょう)漁、灯火夜魚漁、鮑漁、昆布漁などが生き生きと描かれており、よりその感を強くする。『奇観』を粉本とした理由は判らないが、『奇観』を粉本としたのは、俺ならば、という思いが武四郎にあり、あえての背景図にアイヌたちによる刺網漁を配したのではないかと、思われる。実際、そうすることで、生き生きとした漁場の状況を描くことに武四郎は成功しており、そこにこそ武四郎の自負と思い、真骨頂を読み解くことができるのではないかと。

では、その思いとは何か。鮮場での労働者はでは和人の男3人と女1人、アイヌの女2人と男1人である。それに対して、「図彙」では和人男女2人のみで、あとは全部アイヌのみであり、2人乗り漁船9艘で漁撈に従事した者もすべて男アイヌたちだけである。鮮場の特定ができず、文書分析による実態把握を行ってきた者にとって疑問を感じる点もあるが、そう描くことで鮮場の実情を伝えたい武四郎の訴えが込められていると読み解くのは深読みであろうか。すなわち、幕末の蝦夷地鮮漁・鮮場が大部分アイヌの人びとによって担われていることを、「図彙」絵図には単純な読み解きを阻む武四郎のそうした思いが感じられる。